

実践報告

専門職大学院における文章表現演習（その2）

花田 修一¹

本稿は、平成23年度から新しく開講した本学の「文章表現演習」の授業内容を中心に記述したものである。本授業では、次のような演習を行ってきた。①文章表現に関する基礎的知識や基本的技能、②新任者としての自己紹介文、③専門教科（科目）を学ぶ意義に関するメッセージ文、④学級（ホームルーム）担任としての呼びかけ文、⑤生徒に読ませたい図書の推薦文、⑥進路先への生徒に関する推薦文などである。

本稿では、平成23年度と24年度の④⑤⑥の実践を中心に報告する。①②③については、すでに『教育総合研究』第5号（2012年）で報告したところである。

ところで、今日学校教育において論理的思考力や論理的表現力、言語力や言語活動の充実、情報や資料の活用力や多様な価値観の認識力などの育成が強く求められている。そのためには、これらの能力や態度などを生徒に指導できる教師の力量が必要となる。

以下、その一環として、「文章表現演習」の授業について、授業資料や学生の文章などを基にして実践報告をしつつ、その教育的有効性を一層明らかにし、教師育成のための専門職大学院教育における「文章表現演習」の実践的研究開発の一助としたい。

キーワード：文章表現、言語活動、論理的表現力、情報活用力、文章批評、多様な価値観

I 本授業の概要

1 本授業の目的

本授業は、本学を修了後、中学校及び高等学校の教師を目指す学生を対象として開講したものである。授業では、優れた専門職としての教師になるための「文章表現法」の基礎的な知識や基本的な技能を身に付け、その実践的な活用能力を一層高め、教師としての素養や資質をさらに高めること。また、多様な「文章表現法」の演習を通して、これからの中学生及び高校生に対しても、目的や相手や文種などに応じた確かな文章力を身に付けさせることができる指導力や授業力を高めることを目的としたものである。

なお、本授業は、選択科目の一つである。受講者は、2年間で、国語科14名、社会科8名、数学

1 日本教育大学院大学 学校教育研究科

科4名、理科3名、英語科2名の全31名である。座席はペアやグループが組み易いように工夫し、また、他教科との交流ができるように配慮した。

2 本授業の方法と計画

本授業の方法は、まずは、表現とは何か、文章表現とは何か、よい文章表現の条件とは何かについて、授業者の話や受講者の話し合いから始めた。その後、要旨で示したように、①文章表現に関する基礎的知識や基本的技能、②新任者としての自己紹介文、③専門教科(科目)を学ぶ意義に関するメッセージ文、④学級(ホームルーム)担任としての呼びかけ文、⑤生徒に読ませたい図書の推薦文、⑥進路先への生徒に関する推薦文などの文章表現演習を展開した。全15時間計画である。その具体的な授業の方法と内容について、本稿では、④⑤⑥を中心に後述する。

3 本授業の評価

本授業における評価は、出席率(30パーセント・毎時間の評価と反省の記述内容)、演習や発表の内容と参加態度(40パーセント)、定期試験(30パーセント・授業後の筆記試験)などを総合的に判断して評価した。また、この成績評価の方法については、最初の授業で学生に明示した。

II 文章表現演習の授業の実際

1 第1講の授業内容

まずは、本授業のねらい・方法・計画・成績評価について、シラバスを基に授業者から説明した。続いて、表現(Expression)の語義、表現の方法(身体・絵画・音楽・造形・映像・言語・総合など)のそれぞれの特質について授業者が講義した。そして、本授業では、言語表現を中心とした「文章表現」について演習することを確認した。

次に、「よい文章の条件」とは何かについて31名の受講者と話し合った。次に示すような条件が挙げられた。(複数回答)

- 段落などの文章構成に関すること。(8名)
- 読み手を考えた文章に関すること。(6名)
- 明確な主張やテーマに関すること。(5名)
- 読みやすい文字や漢字に関すること。(4名)
- 具体例の挙げ方や例示に関すること。(4名)

そのほか、比喩や倒置など表現技法に関すること(3名)、共感や印象を与える内容に関すること(3名)、短く簡潔な文に関すること(2名)、ジャンル(文種)に応じた内容に関すること(2名)、主述や修飾語の確かさに関すること(2名)、語句や敬語の適切な使い方などに関すること(1名)、インパクトのある冒頭文の書き方に関すること(1名)などが挙げられた。

以上の話し合いの内容をふまえ、授業者は、次のように整理して示した。

- 1 なんのために書くのか・・・目的意識を明確にして書くこと。
- 2 だれに向かって書くのか・・・相手意識を明確にして書くこと。
- 3 なにについて書くのか・・・主題意識を明確にして書くこと。
- 4 どんな順序で書くのか・・・構成意識を明確にして書くこと。
- 5 どのように書くのか・・・記述意識を明確にして書くこと。
- 6 思うように書けたか・・・推敲意識を明確にして書くこと。
- 7 書いたものを省察できるか・評価意識を明確にして書くこと。

また、昔からよく引用される文章上達法の「三多」（中国宋の時代の詩人・欧陽修）の提唱について次のことを補説した。

- 1 看多（かんだ）・・・優れた文章を多く読むこと。多読の勧め。
- 2 做多（さた）・・・文章を多く書くこと。多作の勧め。
- 3 商量多（しょうりょうた）・・・文章を多く工夫して書くこと。推敲の勧め。

さらに、「文は人なり」という格言も紹介し、達意の文章は、結局その人の全人格が反映することも付け加えた。次講の予告をして、第1講の授業を終えた。

2 「学級（ホームルーム）担任としての呼びかけ文」の授業の実際

将来、受講者が中学校及び高等学校の学級担任になった場合、生徒たちにどのような思いを伝えるかという授業を2時間設定した。1時間目は、書いてきた呼びかけ文をペアで読み合い、相互に助言するという方法をとった。2時間目は、相手の助言をもとに再度書き直して、グループ（4班）になって回し読みをして交流する。その後、グループの代表者が全体に発表するという形態にした。助言や相互評価の際、言語内容（認識法）と言語形式（表現法）を土台にして、次のような観点から文章を観るように指導した。

- 1 目的意識は明確であるか・・・学級担任であることを考えて書いているか。
- 2 相手意識は明確であるか・・・担任する生徒のことを考えて書いているか。
- 3 主題意識は明確であるか・・・伝えたい思いを明確に焦点化して書いているか。
- 4 記述意識は明確であるか・・・言葉の使い方や表記法などを考えて書いているか。

次に示すのは、受講者の呼びかけ文の第一稿である。実物は縦書きの原稿用紙（以下同じ）。

（1）中学生を対象とした事例

今回皆さんに伝えたいことは「言葉の重要性」です。

日本では、古来より「言霊」というものが考えられていて、良い言葉を発すると良いことが起こり、悪い（不吉な）言葉を発するとよくないことが起こるとされていました。つまり、言葉には発することでそれに応じた結果を引き起こす力があると考えられていたのです。

私の例を挙げてみましょう。私は、教師という職に就く前に、会社員をしていました。仕事が上

手くいき、ほめられたときは嬉しい気持ちになり、「仕事をもっと頑張ろう」と意欲的になることが出来ました。しかし、逆に仕事が上手くいかないときに上司から怒られると、暗く沈んだ気持ちになります。加えて、「こんなこともできないのか」と言われることもありました。すると、自分の中で、「どうせ自分なんかには出来ないや」という気持ちが起こり、仕事に対する意欲が下がり、普段ならなんてこともない仕事も出来なくなっていきました。

では、皆さんは今まで言葉によって喜んだり、悲しんだり、また、逆の覚えはないでしょうか。きっと少なからずあると思います。私は、皆さんには、これからの人生において人を喜ばせることはあっても、悲しませるような言葉は極力使って欲しくないと思っています。もちろん、部活や仕事などにおいては注意をすべき場面もでてくるでしょう。そういうときには、相手の受けるであろう気持ちを考えて、発する言葉を選んで欲しいのです。

今、皆さんと同年代の人々がいじめを苦にして自らの命を絶つ事件が増えています。いじめは、肉体的なものもありますが、「いなくなればいいのに」のような心無い言葉による精神的なものもあります。これは言葉の力が引き起こした悲しい結果です。

言葉とは、口からパッと発することが出来るものです。そして、形には残りませんが時に人の心に深く刻み付けるものです。手軽に伝えられるからこそ、使うときには細心の注意を払って欲しいのです。言葉を上手に使えることよりも、丁寧に使うことの方が大切なのです。皆さんが言葉の重要性に気づき、心ある言葉の使い手となることを切に願います。

(2) 助言や相互批正などで推敲した箇所と意見

上記「中学生を対象とした事例」の「呼びかけ文」の第一稿に対して、様々な助言や批正がなされた。それらを踏まえて、N君は第二稿を次のように推敲した。第一稿で示した下線の箇所である。

- ・教師という職に就く前に → 教師になる前に
- ・喜んだり、悲しんだり、また、逆の覚え → 喜び、悲しみを感じたり、感じさせたりした覚え
- ・丁寧に → 心を込めて丁寧に
- ・出来る → できる

このことについて、N君は次のようにコメントした。敬体を常体に変えて一部引用する。

推敲の重要性を再度認識した。また、自分の文章を声に出し読むことで「書き手から読み手になる」ということに新たに気がついた。表現の仕方について、いろいろと指摘をしてもらってとても参考になった。先生から「中学生にとっては、わかりやすく、担任としての思いがよく伝わってくる」という評価を受けて嬉しかった。この気持ちを教師になったら生徒にも伝えていきたい。私自身も「心ある言葉の使い手」になれるように言葉の修業を積み重ねていくつもりだ。

(3) 高校生を対象とした事例

「あなたが虚しくすごした今日という日は、昨日死んでいった者達があれ程生きたいと願った明日」
これは韓国の作家、趙昌仁「カシコギ」という作品に登場する言葉です。内容は重い病を抱えた息子とその父親の想いを書いた物語です。気になった方はぜひ、進学・就職する前に読んでみてく

ださい。

皆さんは、この言葉を聴いてみてどのように感じたでしょうか。今これを読んで感じたことは、きちんと心にしまって大切にしてください。

私は、この言葉をはじめて知ったとき、まず自分を恥じました。そして後悔しました。それは、これまで自分が一生懸命でなかったからです。例えば、休日にやらなければならないことを先延ばしにしてしまうなどです。それが自分にとって良いことならまだしも、怠けているのは明白でした。そんな時私はこの言葉に出会って感じたのです。「もっと自分をコントロールできなきゃ」と。そう決心してから私は、以前に比べて積極的に行動するようになり、今では、暇が嫌いになるほどになりました。ただ、決心したから出来たわけではありません。いつも皆さんに授業でも言っている「なぜ」と「プロセス」を明確にすることを心がけました。どうしたら自分が納得できる一日を作れるのか、いつも考えました。そうした経験があったからこそ、私は皆さんに授業で「なぜ」と「プロセス」を明確にすることを指導し続けていたのです。

舞岡高校を卒業すれば、一人ひとりが選んだ未来に羽ばたいていきます。その中で、私が冒頭に述べた言葉を逐一考えてみてください。人生二度と来ない今日という日は、本当に素晴らしいものなのです。その一日を自分なりに充実させてほしいと思っています。

（4）助言や相互批正などで推敲した箇所と意見

上記「高校生を対象とした事例」の「呼びかけ文」の第一稿に対して、様々な助言や批正がなされた。それらを踏まえて、K君は第二稿を次のように推敲した。第一稿で示した下線の箇所である。

- ・ 二段落と三段落の順序を逆にしてわかりやすくした。
- ・ 「言葉に出会ったとき」を具体的に明記した。
- ・ 四段落の最初から三行の内容を短くして簡潔にした。
- ・ 「指導」を「発信」として、生徒に伝えたいという思いを強調した。
- ・ 最終段落の文末を「思っています」から「願っています」に直して生徒に訴えた。
- ・ 「なぜ」と「プロセス」にその根拠となる具体例を入れようと考えたが、文字の制限上困難であったため割愛した。
- ・ 四段落に「私」という語が多すぎたので減らした。

このことについて、K君は次のようにコメントした。敬体を常体に変えて一部引用する。

やはり一度書いた文章は推敲に推敲を重ねなければならないことを学んだ。友達や先生の助言や批判を素直に受け入れることで文章力も伸びていくことを実感した。感謝！

3 「生徒に読ませたい図書の推薦文」の授業の実際

中学生や高校生にどんな本を読んでほしいかという視点から書いた授業である。これも自宅学習を別にして2時間設定した。その際、次のような観点から書くように指示した。評価の観点も同じである。授業の形態は、「呼びかけ文」と同じように進めた。

- 1 目的意識は明確であるか・生徒が読みたくなるように考えて書いているか。
- 2 相手意識は明確であるか・生徒の発達段階を考えて書いているか。
- 3 主題意識は明確であるか・どんなことを伝えたいかを考えて書いているか。
- 4 記述意識は明確であるか・生徒にわかりやすい表現を考えて書いているか。

以下に示すのは、受講者の図書推薦文の第一稿である。

(1) 中学生を対象とした事例

私は、ミヒヤエル・エンデによる『モモ』という本を皆さんに薦めます。

私がこの本を薦めた理由は二つあります。

一つ目は、人の話を聞くことの大切さを教えてくれるからです。皆さんは、友達と喧嘩をした時にあまりにも怒りの気持ちが高ぶって、自分のことだけしか考えられなくなったことはありませんか。この本は、そんな時こそ人の話を聞くべきであることを「モモ」という女の子を通して気づかせてくれます。

二つ目は、読みやすいからです。この本は「児童文学」という種類に分類されており、子どものために書かれた本です。ですから、難しい字や言葉はありません。「内容が幼稚っぽいのではないか」と思う人もいるかもしれませんが、そんなことはありません。人と人との関わりを考えさせる深い内容であるので、大人の人が読んでも楽しめます。

以上の二つから、私は『モモ』という本を読んでもらいたいと思います。皆さんがこの本を通して人の話を聞くことを大切にしよう願っています。

(2) 助言や相互批正などで推敲した箇所と意見

上記「中学生を対象とした事例」の「図書推薦文」の第一稿にたいして、様々な助言や批正がなされた。それらを踏まえて、Y君は第二稿を次のように推敲した。第一稿で示した下線の箇所である。

- ・ 「私がこの本を薦めた理由」を「その理由」と簡潔に直した。
- ・ 段落の数を減らした。
- ・ 「ミヒヤエル・エンデによる」を「ミヒヤエル・エンデの」に修正した。
- ・ 二つ目の理由を「時間の大切さを教えてくれるから」に推敲した。
- ・ したがって、二段落目の「この本は～楽しめます」を「誰のものでもない自分の時間を自分自身のために使うこと。そして、自分の時間をどう使うかを、自分自身で決めること。これらのことがこの本では強く強調されています」と直した。「読みやすい」という理由を「時間の大切さ」という理由に変えたからである。
- ・ 最後の段落に、推薦理由の二点を簡潔にまとめた。

このことについて、Y君は次のようにコメントした。敬体を常体に変えて一部引用する。

推敲に当たっては、音読と黙読のそれぞれの効用について学ぶことができた。目的や場面などに応じて、より客観的に読める音読か、効率的に読める黙読かを使い分けていきたい。授業の後

半で、自分の文章を皆さんから批評をしていただいた。自分自身が否定的（ネガティブ）に物事を考えることがよくあるので、そういった面が文章に表れてしまったことを指摘された。いろいろと考えさせられた。これからは、もっと肯定的（ポジティブ）で、生徒の意欲を引き出せるような文章が書けるように心がけていきたい。

（3）高校生を対象とした事例

私がオススメする一冊は、サンクチュアリ出版発行・編集プロダクション verb の「遺書」という本です。この本には、5 人の自殺をした人の遺書と遺族の手紙を全文掲載し、自殺前後の状況や報道についても詳しく書かれています。

この本が発行された頃はいじめによる自殺も多く、毎日のようにニュースや特別番組で「いじめ」や「自殺」について議論がされていました。遺書の全文掲載をした本書の出版は世間に大きな衝撃を与え、この本の出版による特別番組が組まれるほどの話題になりました。

私がこの本を紹介することで「自殺は悪いことだ」とか「自殺したら負け」とか、そんな議論をしてほしいわけではありません。

いじめられていることを誰にも言えずに悩んでいる人。

「もう死にたい」と考えたことがある人。

これまでそういう考えとは無縁だった人も。

できれば、一人でゆっくりと本を読むことの出来る場所でこの本を読んでみてください。

私はこの本から多くのことを感じました。

あなたは、何を感じますか？

（4）助言や相互批評などで推敲した箇所と意見

上記「高校生を対象とした事例」の「図書推薦文」の第一稿に対して、様々な助言や批正がなされた。それらを踏まえて、T 君は第二稿を次のように推敲した。第一稿で示した下線の箇所である。

- ・ 「いじめによる自殺も多く」を「中学生や高校生の自殺が」という言葉を入れることで、生徒と同世代の人のことが書いてあることを強調した。
- ・ 「私が～ありません」の箇所を「自殺を考え、実行してしまうほどに追いつめられてしまった人達の気持ちや周りの人達の気持ち、日ごろの何気ない言動が与える影響の大きさなど、私自身がいろいろなことを考えさせられた一冊です」と修正した。「議論を～」の部分が消極的だという批判を受け入れたからである。
- ・ 「できれば、」の部分を削除した。
- ・ 「私は～感じますか？」の結びの部分を「きっといろいろなことを感じ、考えるきっかけになると思います。何を感じ、何を考えたか、もしよかったら一緒に話してみませんか？」と変更した。

このことについて、T 君は次のようにコメントした。敬体を常体に変えて一部引用する。

勤務先の学校の図書館での書籍紹介は、「無難なもの」が多く、興味のある生徒なら普通に手にするような本が多いと感じている。今回は、「特定の、居場所を見失っている生徒」へのメッセージとして本書を推薦した。そのような生徒が、この推薦図書をきっかけに、理科準備室に顔を出してくれると嬉しい。この本を読んで感じたことをお互いに話せるように、自分が感じたことについては、あえて記述を避けた。今日は、自分の文章を批評してもらった。重いテーマの本で、予想していたように「テーマがショッキング」という意見をもらった。私は、この本を「居場所に迷っている生徒」に読んでもらうことで、私自身がその居場所の一つになることができたらと思い、あえてこの一冊を選んだ。読んで楽しい本や勉強になる本は多く紹介されている。しかし、それらの本では救われない生徒も少なからずいる。だとすれば、この本を推薦し、一人の生徒でも救うことができたらいいと考えた。

4 「進路先への生徒の推薦文」の授業の実際

生徒の進路先の高校や大学に対して、担任として推薦するという視点から書いた文章である。これも2時間設定した。授業の形態は、最初にペアトークを取り入れた。推薦人物としてお互いを理解するためである。その際、志望校、志望理由、学校での実績、学習面の特長、交友関係などについてお互いがインタビュー形式で行った。それらの内容を基にして、次のような観点から書くように指示した。評価の観点も同じである。

- 1 目的意識は明確であるか・・・上級校に推薦する担任の立場を考えて書いているか。
- 2 相手意識は明確であるか・・・上級校の読む相手や立場を考えて書いているか。
- 3 主題意識は明確であるか・・・生徒の特長を的確に捉えて書いているか。
- 4 記述意識は明確であるか・・・上級校に失礼がないように考えて書いているか。

(1) 高等学校への推薦文の事例

① インタビューをしたメモの一部

- 志望校：私立〇〇高等学校
- 志望理由：バレーボールの強い高校に進学したい。春高バレーに出場したい。部活だけでなく勉強もしっかりしたい。自主性を重んじている。
- 実績：バレーボールのセンターとして関東大会にスタメンで出場。副部長としてチームをリード。毎日スクワットで鍛えた。
- 学習面：自分で納得できる勉強。好きな教科は、国語・理科・体育・美術。苦手は英語の長文。
- 交友面：好き嫌いなくだれとでも仲良く。友達関係でストレスない。クラスの委員長。合唱コンクールの指揮者。

② 推薦文

平成 23 年 12 月 15 日

〇〇高等学校

校長 〇〇 〇〇 様

日本教育大学院大学附属神田中学校

第 3 学年担任 〇〇 〇〇

推 薦 状

この度は貴校の普通科推薦入試に際し、〇〇 〇〇を推薦いたします。

〇〇は、現在、日本教育大学院大学附属神田中学校の 3 年生です。

部活動においては、バレーボール部に所属し、副部長を務めチームを引っ張ってきました。1 年生の頃から背が高かったこともあり、センターとしてスタメンを勝ち取り、誰にも負けないジャンプ力をつけようと毎日スクワットを続けてきた努力家です。実績としましては、関東大会に選手として出場し、攻撃・防御ともに獅子奮迅の活躍をすることでチームとしてベスト 8 まで勝ち上がりました。また、高校生活における部活動に対しても非常に意欲的で、高校生の大会を見学に行き、いろいろなチームの様子を見てきたようです。その中で、貴校のバレー部は特に生徒が自主的で部員がチームの雰囲気を作り出している印象が非常に強かったと言っています。そのため、高校入学後は貴校のバレー部に所属し、仲間と協力することで全国大会を目指していきたいと今から目標を持っています。

部活動以外の学校生活においては、文武両道を意識しており、中学校 3 年間の定期試験でも日頃の自己学習に加え、部活動が活動休止になる試験期間には仲間とともに教え合いを行うことで苦手科目においても平均以上の得点をあげてきました。

また、学級委員としてクラスをまとめ、合唱コンクールでは指揮者として放課後のクラス練習の中心になり、常にクラスの中心に立ち積極的に交友を図る姿を見ることが出来ました。〇〇の誰とでも分け隔てなく交流をしていく姿勢は、担任として学級運営をするにあたり、非常に心強いものでした。

積極的な部活動への参加と決して学習にも手を抜くことのない人間性は、貴校の教育理念である「着実・勤勉・自主」を実践するにふさわしいものであることを保証いたします。

以上の理由により、貴校の生徒にふさわしい人物と考え、ここに〇〇 〇〇を強く推薦する次第です。格別にお取り計らいのこと、どうぞよろしくご厚意申し上げます。

（2）助言や相互批正などで推敲した箇所と意見

上記「進路先への生徒の推薦文」の「高等学校への推薦文の事例」の第一稿に対して、様々な助言や批判がなされた。それらも踏まえ、S 君は、第二稿を次のように推敲した。第一稿で示した下線の箇所である。

志望理由の一番の項目が「部活動」だったため、それを最初に持ってきて文字数も多くした。ま

た、インタビューを通して〇〇君の魅力は部活動だけではなく、その他のことにも決して手を抜かないところにあると感じたため、その良いところを短くいくつか書いた。相互評価で、特に指摘が集中した「部活動」についての部分を中心に、言葉遣いを見直し、文章の前後を入れ替えるなどして、〇〇君の良さをよりアピールできるように推敲した。「普通科なのでもっと部活以外のことも取り上げたほうがよい」という指摘もあったが、〇〇君の最大のアピールは部活であると考えたため、そのことを重視した。

- ・ 「1年生の頃～抜擢されました」の部分で、「バレーボール選手として、誰にも負けないジャンプ力を身につけようと考え、1年生の頃から毎日スクワットを続けた結果として、センターとしてレギュラーに抜擢されました。」と推敲した。
- ・ 「見てきたようです」を「見てきました」に修正した。
- ・ 「もの」を「生徒」に修正した。

(3) 大学への推薦文の事例

① インタビューをしたメモの一部

- 志望校：私立〇〇大学
- 志望理由：ロボットエンジニアを目指したい。ロボット工学の研究をしたい。
- 実績：学級委員、図書委員、美化委員。自主的にロボット工学の研究。
- 学習面：積極的。問題解決学習に興味。数学研究会。書道部。
- 交友面：友達意識。委員会活動でのリーダー。クラスの仲間づくり。思いやり。

② 推薦文

平成24年1月12日

〇〇大学

学長 〇〇 〇〇 様

日本教育大学院大学附属神田高等学校

第3学年担任 〇〇 〇〇

推 薦 状

この度、貴大学工学部機械工学科入学試験に際して〇〇 〇〇を推薦いたします。

〇〇は、現在、日本教育大学院大学附属高等学校普通科の3年生です。

本校において、日常の授業では積極的な姿勢で取りくみ、問題解決を図ろうとしている姿勢が見られます。委員会では、1年生で「図書委員」、2年生で「美化委員」を務め、常に他者を意識して主体的に行動する態度が印象的です。

これは、常に物事を客観的に見て行動しようとする姿勢が育っているためであると考えております。具体的に〇〇は、現在、ロボットエンジニアを目指しています。その際、漠然と自らの目標を定めるのではなく、「エンジニア」というカテゴリーを様々な職種から見、一つの事柄を多面的に見ようとする姿勢を常に意識して行動しています。

また、貴校で行われるロボティックライフサポート研究の観点から、日常生活に密着した研究テーマに意欲を示しています。そこから、他者が快適な日常を過ごすためにどうしたらよいかについて積極的に考察し、挑戦しているところです。最近では、ロボット展に赴き、ロボット工学について自主的に勉学に励んでおります。

今年度からは、「学級委員」を務め、学級の実態を踏まえた、教室内の環境のあり方やクラスメートが今学級内に求めているものは何かを模索し、行動しており、自他に関わらず、一生懸命問題解決を図ろうと尽力しております。

また、中学時代には数学研究会に所属し、「ハノイの塔」を解く勉強会を運営し、数学の楽しさや面白さを追及することや高校時代には書道部にも所属し、文字の多様性や文化を学ぼうとするなど、多様な分野に深い興味と関心を抱いています。

貴校の「自主的・自律的理念を基とした教育目標」や「コミュニケーション能力の維持・向上」「多種多様な論理を学ぼうとする姿勢」という教育方針に相応しい人物である事を保証いたします。

以上の理由により、貴校の工学部機械工学科生として適任であると考え、ここに〇〇〇〇を強く推薦する次第です。格別にお計らいのこと、どうぞよろしく申し上げます。

（4）助言や相互批正などで推敲した箇所と意見

上記「進路先への生徒の推薦文」の「大学への推薦文の事例」の第一稿に対して、様々な助言や批判がなされた。それらも踏まえ、Aさんは、第二稿を次のように推敲した。第一稿で示した下線の箇所である。

- ・ 「問題解決を図ろう」を具体的に「数学や物理などでは、友達とともに問題を解決しようという」に推敲した。
- ・ 「他者を意識して」を「委員会のメンバーのことを考えて」と修正した。「他者」という表現が冷たい感じがするという批判を受け入れた。
- ・ 「貴校」は、すべて「貴大学」に直した。
- ・ 「他者」を「多くの人」に、「日常」を「日常生活」に改めた。
- ・ 「今年度からは」を「3年生になって」に修正した。
- ・ 「学級の実態を踏まえた」を削除した。
- ・ 「自他に関わらず」を「クラスホームづくりのために」と修正した。
- ・ 「追及」を「追究」に変換した。

Aさんは、次のようなコメントを付している。

推薦文を書くということは、担任は常に生徒を観察しておかねばならないということでもある。インタビューは、「質問力」や「対話力」を磨くのに格好の言語活動だと思った。生徒の長所をいかに具体的に取り上げて書くか、読み手である上級校に対して説得力のある推薦文を書く難しさを経験した。また、推薦文は教師と生徒の協働作業でもあり、そこにはお互いの信頼関係が必要だと感じた。

Ⅲ 本授業の成果と今後の課題

以上、「専門職大学院における『文章表現演習』（その2）」の一部について、実践報告をしてきた。「要旨」でも述べたように、本稿では、「学級（ホームルーム）担任としての呼びかけ文」「生徒に読ませたい図書の推薦文」「進路先への生徒に関する推薦文」などの授業内容に焦点化して報告した。

本授業の成果を整理すると次のようなことが言える。

- 文章表現に対する受講者のモチベーションが高まったこと。
- 文章表現に関する基礎的知識や基本的な技能を演習で習得したこと。
- 学校現場における様々な文章表現法の有効活用を開発したこと。

本授業で筆者が期待していた「文章表現法の向上」「論理的表現力の習得と活用」「認識力の深化・拡充」「情報活用力」「文章批評力（相互批正力）」「多様な価値観の認識」なども、おおむね受講者の身についたと考えている。受講者一人ひとりが共同推敲や相互評価を演習することによって、文章表現力は確実に上達した。それは、次のような受講生の授業評価からも伺うことができる。本稿では、平成23年度を受講生8名に限って、その一部を引用し紹介したい。なお、平成22年度を受講生の評価については、本紀要第5号（PP.56-58）を参照いただければ幸いである。

- 推敲力が文章力になることを学びました。自己推敲も大切ですが、友達と共同推敲（批正や批判など）することが表現の幅を広げることも実感しました。お互いの文章を批評し合うこと、その批判を素直に受け入れることが自己の成長にもつながることを経験しました。私は、特に「文章は簡潔に書く」という意識が生まれました。冗長ではなく簡潔に、具体例などを挙げて論理的でわかりやすい説得力のある文章を書くように努めていきます。
- 良い文章を書くには「三つの多」が必要であることを最初に学んだ。これを授業の中でも実感することになった。五回にわたる文章課題の作成（多作）、それを受講生での読み合い（多読）、そして共同推敲・批正・批判（多推敲）で実践したことになる。その中で、人から意見をもらい、自分も意見を言ううちに「文章力」が高まっていくのを感じた。ここで学んだことを、生徒たちにも伝えていきたい。
- この半期、いろいろな題目で文章表現や協同推敲を行ってきました。本講義を履修したことで、細部にわたる批評（正）をいただいたことを文章表現に生かしていきます。これからも、情熱・意志・向上心を持って「文章道」のさらなる飛躍、教師力の向上をめざし、日々研究と修養に努め、励んでいきます。
- この「文章表現演習」を通して大切なことをたくさん学びました。例えば、説得力のある文章にするためには具体例を用いること、冗長な表現は避けて簡潔に表現すること、読み手を意識して書くことなどです。非常にためになりました。また、書いた文章を学生全員で相互批評

することで、自分では気が付かなかったことが明らかになったり、文章を見る目が養われたりして、学び合うことの大切さを知ることができてよかったです。この授業で学んだことを、教員採用試験や教員としての公文書を書くときなどに生かし、日々文章道を究めていきたいと思います。

- この授業を通して学んだことは、「物事を伝えたい相手にどのように書けばよいかを考え続ける姿勢」の大切さです。相手の立場に立って考える姿勢や思考が形づくられていったと思います。これも相互批評や批判のおかげです。これからも日本語で表現することの改善に努めます。
- 授業後に先生が言われるコメントは、ともに成長していくのによい方法であると思う。「生徒を信じ続けること」「生徒の良いところを発見しほめること」「生涯文章修業」などの言葉が忘れられない。自分を高め、生徒の個性を育み、信頼し合っている教師を目指したい。
- 私は文章を書くとき、「きれいな文章」と「気持ちを込める」とを同時に含めることが苦手です。前者を意識すると軽い文章になり、後者を意識すると表現技法や全体のバランスがおろそかになってしまいます。授業での五つの文章課題の文章では、そのところをよく批判されました。なかなかうまくいかずに苦しいこともありましたが、それに挑戦する場にもなり、この授業を受講してよかったです。他の人の意見や批判も素直に受け入れていく広い心も忘れないようにしていこうと思います。
- この授業を通して最も学んだことは、論理的で説得力のある文にして、簡潔で冗長にならないようにすることであった。また、読み手を意識して書き、客観的に具体的に述べることも学んだ。これからも文章の上達にがんばりたい。

今後は、さらに多様な文章の形態やジャンルにも挑戦させ、その効果的な表現法や有効な方法の開発に取り組んでいきたい。それはまた、現在及び将来にわたって学校教育に求められている「言語力」育成のために、「言語活動」の具体的な実践的研究課題でもありと考えるからでもある。

（引用文献及び参考文献）

- 芦永奈雄（2010）『コミュニケーション力を高める文章の技術』フォレスト出版
 荊木美行（1997）『大学生のための知的文章術』燃焼社
 内山力（2011）『論理的な伝え方を身につける』PHP 新書
 大島弥生他（2009）『日本語表現能力を育む授業のアイデア』ひつじ書房
 小笠原信之（2011）『伝わる！文章力が身につく本』高橋書店
 沖森卓也他（1998）『日本語表現法』三省堂
 加藤典洋（1996）『言語表現法講義』岩波書店
 黒木登志夫（2011）『知的文章とプレゼンテーション』中公新書
 工藤順一（2010）『文章術』中公新書

- 齋藤孝（2010）『人を動かす文章術』講談社現代新書
- 高崎みどり他（2008）『ここからはじまる文章・談話』ひつじ書房
- 中村明（1997）『文章力をつける』日本経済新聞社
- 中村明（2011）『語感トレーニング』岩波新書
- 成川豊彦（2010）『成川式文章の書き方』PHP 研究所
- 西村克己（2006）『論理的な文章の書き方が面白いほど身につく本』中経出版
- 野内良三（2010）『日本語作文術』中公新書
- 花田修一（2011）「専門職大学院における文章表現演習（その1）『教育総合研究 日本教育大学院
大学紀要 第5号』PP.49-60
- 花田修一（2010-2011）「表現力の開発」『教育科学国語教育』（2011年4月号から2012年3月
号までの12回にわたる連載稿）明治図書
- 花田修一（2010）「『言語力の育成』なぜ強調されるのか—適切な言語運用力が人間力を育む」『現
代教育科学』（3月号）明治図書 PP.11-13
- 花田修一（2010）「『習得・活用・探求』学習—国語科学習の転換—実践的言語活用力を育てよう」
『現代教育科学』（5月号）明治図書 PP.59-62
- 花田修一（1999）『「伝え合う力」とは何か—ある国語教室からの発信—』三省堂
- 花田修一（1999）『「書くこと」の授業改革—情報化対応の作文技術—』明治図書
- 飛田多喜雄他（1975）『文章表現の理論と方法』明治図書
- 樋口裕一（2000）『ホンモノの文章力』集英社新書
- 平井昌夫（1972）『文章を書く技術』社会思想社
- 平井昌夫（1976）『文章上達法』至文堂
- 藤沢晃治（1999）『「分かりやすい表現」の技術』講談社
- 茂呂雄二（1988）『なぜ人は書くのか』東京大学出版会
- 山崎康司（2011）『入門考える技術・書く技術』ダイヤモンド社

花田修一 実践報告：専門職大学院における文章表現演習（その2） へのコメント

林 義樹（日本教育大学院大学 学校教育研究科 教授）

著者の花田修一氏は若いときから『日本一の国語の教師』を目指して日々精進してこられた本学が誇るべき教員の一人である。日常の挨拶・声掛け・応答、会議での司会・発言などいつも啓発され、言語生活のお手本を見せていただいているようで感謝している。たぶん、学生もいつのまにか感化されていると思う。

ところで、本稿を拝見して、①教員をめざす学生に実用的な国語力を形成するという観点から、及び②大学院に於ける国語科授業研究の方法の観点から所感を述べる。

まず、第1の観点から。学習指導要領の改訂で、言語活動の充実をすべての教員が総力を挙げて取り組むことになったが、本授業実践はそのような状況を踏まえて開発されたパイロット授業として成功している。すなわち、国語科だけでなく社会科・数学科・理科・英語科の学生がこの授業を履修した。いわば、教職系専門職大学院の共通教養教育科目にあたる。その意味での教材の選択にも工夫がされている。また、集まった多様な学生の協働的交流で授業が展開されている。私は、教職系専門職大学院における共通教養科目の授業開発は本学だけでなく大学院教育一般にとっても重要課題であると考えている。本授業はそのような観点から大いに示唆を与えてくれる。

次に、第2の観点から。大学院における実践的な授業研究のあり方の観点からすると、本実践は一種のアクション・リサーチであるといえよう。シラバスは小“仮設”であり、授業実践とその記録は、検証の準備作業といえ、解釈としての成果と課題の整理で検証が完了する。その観点から、本報告はきわめて客観的・科学的である。意図の提示、使用した教材の提示→学生の行動の記述→学生の言説が詳細に記録・提示されている。おそらくティーチング・ポートフォリオが作成されていたであろうと推察される。花田流の紀要掲載を一応のゴールとする日常的に持続可能な実践研究法が見えている。この意味でも示唆的である。

あえて、提案するなら、記述の際に教材部分は囲みに、学生のコメント・感想部分は数行改行後に数段落とする等し、授業者の行動・言説・解釈等の部分を本文とする等記載法を区別するとすっきりするかも知れない。またアクション・リサーチのサイクルを意識して仮設から“仮説”へのメタ知識化をあえて意識化して執筆されると原理の発見に飛躍できる道が開けるかも知れない。